マリナー号来航

嘉永二年閏四月八日（一八四九年五月二十九日）朝、城ケ島の沖に異国船の姿をみた。この連絡を受けた浦賀奉行所の三崎御役宅詰めの与力が直ちに出動し、異国船に停船を命じた。

この異国船は、イギリス支那艦隊に所属する測量船で「マリナー号」であること、キャプテンはマゼソンといい乗組員百十人、大砲は左右に六門と船首に一門を備えていることなどの情報が浦賀奉行所へ報告された。また、三浦半島の警備についていた彦根藩と房総半島を警備していた忍藩から出された警備船も到着し、マリナー号へ乗船した。

報告を受けた浦賀奉行所からは、与力一名、同心組頭一名、同心四名、オランダ通詞一名が一番から五番の警備船に乗って、停船していたマリナー号へ行き、三崎からの与力と交代して、役人を乗せたままマリナー号を内海へ誘導し、浦賀港の出口に築かれた千代が崎台場沖に係留させた。この時点で、浦賀奉行の戸田伊豆守は、イギリス船は「至って穏やかなる船」で、水や野菜を望むだけ与え、ほどよく諭せば早々に出帆するであろうと思っていた。

それでも翌九日、与力田中信吾は通詞の加福喜十郎を伴ってマリナー号を訪れた際に、マリナー号の来航目的が通商であるのなら、「外交の事は長崎で扱うことになっているので、浦賀からは速やかに退去すべし」と申し入れた。

こうしたなか、マリナー号から浦賀への上陸の申し入れがあった。もちろんその要求は認められなかったが、マリナー号には周辺をボートで漕ぎまわることが許可され、航海士のハロウランは通訳を伴って、久里浜沖にある「あしか島」へ上陸した。また、マリナー号が「オクタント（航海用に用いる測量機器）を用いていることを奉行所の役人たちは気付いていたが、制止した様子はなかった。

マリナー号からは牛や鶏などの供給が要望されたが、奉行所は、この要望は受けられないと拒否し、水と大根などの野菜、卵が与えられた。

来航三日目の十日は、与力の田中信吾と香山又蔵がマリナー号へ出向き、出帆を促した。しかし、マリナー号からは再び浦賀への上陸許可が求められた。マゼソン艦長は「上陸を許可してもらえたなら、鉄砲でもなんでも好きなものをプレゼントしてもいい」とまで、言っていたが、この要望は叶えられなかった。このほかにも品物の交換や日本の地図を求められたが、いずれも拒否をした。それでも雰囲気は和らいで、田中や香山は士官室に招かれ、酒やパンなどのご馳走が振る舞われた。

この日、マリナー号から明日出帆することが告げられた。マゼソン艦長は通訳のアトゥを通じて、「天下様、御奉行様にはお目にかかることはありませんでしたので、何も申すことはありませんが、皆さまには色々お世話になりました」とあいさつした。

このマリナー号の通訳のアトゥという人物について、「上海の人の紹介で通訳として乗り込んでいた。通弁は至ってよろしく日本人と疑われるほど、イギリスの服を着て、年齢は四十歳ぐらい、髪の毛は長く黒、肌の色や眼の色などは日本人と少しも変わらない。どこで日本語を覚えたのか尋ねると、彼の父が長崎へ十四、五度来たので、その父より覚えた」といった。この人物は天保八（一八三七）年六月に浦賀へ来航したアメリカ船モリソン号で日本へ帰ってくる予定であった尾張国の宝順丸の乗組員・音吉であった。モリソン号で日本の土を踏めなかった音吉は、中国で実業家としての人生を送り、日本人漂流民らの援助活動を続けていた。（了）